

白猿が傷癒やす伝説の湯

湯の心旅

※鉛温泉(岩手県)

白い猿は神の化身だろう。岩手県・鉛温泉の名物風呂は発見伝説にちなんで「白猿の湯」の名がつく。昔ながらの湯治場なのに、ラグジュアリー宿も併設しているところが面白い。

お城の石垣を思わせる壁の上に木枠の窓と高い天井が続いている。洗い場もない、楕円形の大きな湯船が一つ。はしっこに小さな丸いぬる湯がある。天井が高く、湯気が抜けるから、曇ることはない。古いが清潔感のある端正な湯殿だ。

10年前に来たときと何ら変わっていない。そしていそは、ベタベタと貼ってあった「のぞき見禁止」などの貼り紙がきれいはがされていたらいいか。時の流れと無関係な普遍的な美しさを感じる。

「この空間、いいね。天井の黒ずみも味があるじゃない」。盛岡から自帰入浴で訪れた63才の男性は2、3か月に一度はつかりにくる。空気に触れていない新鮮な湯が浴槽の下から湧き出ているのが魅力という。湯とひたすら向き合う時間が流れていく。

12ある花巻温泉郷の一つ、鉛温泉は今から600年以上前に、一匹の白猿が桂の木の間から湧き出す温泉で手足の傷を癒やしているのを見つけたのが始まり。

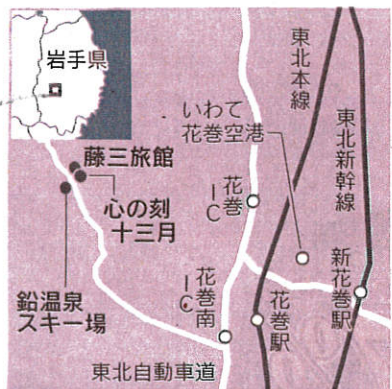
藤三旅館の看板風呂「白猿の湯」は「日本一深い立ち湯」をうたう。足元まで透き通る無色透明の湯なのに混浴。湯あみ着などは禁止だから女性客は専用時間を狙い入る。

「うま先立ちしないと、私の身長じゃ濡れちゃう」。先客の身長155cmの女性と言う。湯船の深さは1・25mというが、深いところは1・4mはあり、身長170cmの私でも鎖骨が隠れる。立って入るから全身にくまなく水圧がかかって、血液の巡りが早い。5分で十分に温まった。

「コロナ禍前は半年ほど滞



地階から2階の高さまでの空間が広がる「白猿の湯」(岩手県花巻市)＝藤田 修平撮影



行き方は JR東北本線花巻駅から送迎バスで約40分、東北新幹線新花巻駅から同約55分(要予約)。東北道花巻南インターチェンジ(1C)から約20分。

温泉情報 弱アルカリ性、アルカリ性の単純温泉。

今夜の宿 藤三旅館(☎0198・25・2311)は36室(トイレなし30室)、1泊2食1人1万6000円(1人なら1万2800円)～。湯治部25室、1泊2食5650円(同6750円)～。十二月14室、1泊2食2万6190円(同4万9237円)～。

食べたい 嘉詞屋(☎0198・22・3322)はわんこそば全日本大会発祥の店。わんこそば3500円(2人以上で要予約)。

露天風呂付き客室の宿 併設



総ヶやキ造りの旅館棟は太平洋戦争が始まる前の1941年(昭和16年)築



白を基調にした「心の刻」十二月の客室。全室源泉かけ流しの半露天風呂付き

在する人もいたけど、現在はせいぜい1週間(宿のスタッフ)。長期滞在する人はめっきり減ったという。

この日は旅館部に宿泊した。8割の客室にトイレや洗面所がついておらず不便さは否めないものの、一人でも利用できる気安さはいい。実際、一人旅率は高かった。

夕食ではほやの酢味噌和え、花巻の銘柄豚「白金豚」のしゃぶしゃぶなど地場の山の幸を地酒とともにおいしくいただく。

2015年には高級ラインの「心の刻」を再開した。壁、家具、床をすべて真っ白に統一し、アイアン家具を置いたモダンな空間。廊下にはアロマの香りが漂う。かつての自炊棟を半分取り壊し、高級宿をつくったという。湯治宿とは全く雰囲気異なるラグジュアリーな空間は一見ミスマッチな気もするが、お客様の需要を見込んで開業に踏み切った経営者は先見の明がありそうだ。

見の明がありそうだ。十二月の客室には露天風呂があるが、もちろん「白猿の湯」にもつけられる。高級宿に泊まって、歴史ある名湯に浸る。宿泊の選択肢が増えることで客層にも広がりが見られるに違いない。

(旅行作家 野添 ちかこ) 新型コロナウイルスの感染が広がっている地域では、不要不急の外出は控えたい。事態が終息したら、ぜひ現地を訪れてください。